



13 本展チラシ

心象工芸展 Imaginal Crafts

2024年
9月6日(金)～12月1日(日) 主催：国立工芸館

開館時間	午前9時30分～午後5時30分 ※入館は開館の30分前まで
休館日	月曜日 ※ただし9/16、23、10/14、11/4は開館、9/17(火)、24(火)、10/15(火)、11/5(火)
観覧料	一般 1,000円 (900円) 大学生 800円 (700円) 高校生 500円 (400円)

※()内は20名以上の団体料金・割引料金。いずれも消費税込。中学生以下、MOMAT支援サークルパートナー企業(同伴者1名まで、シルバーパートナーは本人のみ)、障害者手帳をお持ちの方と付添者(1名)は無料。キャンパスメンバーズ加入校の学生・教職員は、学生証・職員証の提示により団体料金でご鑑賞いただけます。いしかわ文化の日(10/20)は団体料金・割引料金。文化の日(11/3)は無料

関連イベント 要予約(各定員45名) 会場はいずれも国立工芸館 多目的室

トークショー

「私小説を表現すること」

日時：9月7日(土) 午後1時30分～午後3時

登壇者：沖潤子氏、高橋賢悟氏

ファシリテーター：岩井美恵子(国立工芸館工芸課長、本展企画者)

実演＋トークショー

「記憶や思い出の中の風景を可視化すること」

日時：9月21日(土) 午後1時30分～午後3時

講師：中川衛氏

司会：岩井美恵子

主催：兼六園周辺文化の森等活性化推進実行委員会

実演＋トークショー

「景色を作品にこめる」

日時：9月28日(土) 午後1時30分～午後3時

講師：中田真裕氏

司会：岩井美恵子

トークショー

「土地との関わり」

日時：10月5日(土) 午後1時30分～午後3時

登壇者：佐々木類氏、松永圭太氏

ファシリテーター：岩井美恵子

※申込方法はホームページをご確認ください。※内容や日時は都合により変更となる可能性があります。

次回展予告

反復と偶然の工芸展(仮称)

2024年12月17日(火)～2025年2月24日(月・祝)

反復と偶然という対照的な言葉を鍵に、工芸・デザイン作品を紹介。反復する技術が造形につながる作品や、複数揃える用途のあるものなど、反復から生まれる形には工芸やデザインならではの特徴がみられます。一方で自然素材がもつ偶然性が反復を打ち破り、作品の魅力となることがあります。両極の特徴から工芸の魅力を探ります。

同時開催

食を彩る工芸 現代工芸と茶懷石の器展

2024年11月22日(金)～12月1日(日)

石川県を拠点に活躍する8人の若手工芸家が新たに懷石の器を制作しました。新しい時代を感じさせる工芸の魅力をお楽しみください。

会場：国立工芸館 多目的室1

開館時間：午前9時30分～午後5時30分 ※入館は閉館の30分前まで

休館日：11月25日(月) 主催：国立工芸館

アクセス

JR金沢駅兼六園口(東口)より

- バス
- ◎3番乗り場：どの系統でも乗車可、「広坂・21世紀美術館(石浦神社前)」下車徒歩7分
 - ◎6番乗り場：乗車(「柳橋」行を除く)、「出羽町」下車徒歩5分
 - ◎8番乗り場：どの系統でも乗車可、「広坂・21世紀美術館(しいのき迎賓館前)」下車徒歩9分

車

北陸自動車道金沢西ICまたは金沢森本ICから20～30分
近隣に文化施設共用駐車場(無料)があります。

国立工芸館
National Crafts Museum

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-2
お問い合わせ 050-5541-8600 (ハローダイヤル)
<https://www.momat.go.jp/craft-museum>



Press
release
プレスリリース

心象工芸展

Imaginal Crafts

記者発表会・内見会

一般公開に先駆けて報道関係の皆さまのみの発表会、および内見会を行います。

日時：9月5日(木) 午前11時30分～午後1時(受付開始 午前11時30分)

参加ご希望の方は、下記のメールアドレスまたはFaxよりご所属・お名前・参加人数を記入の上、ご連絡ください。

国立工芸館
National Crafts Museum

沖潤子《水蜜桃》2020年 個人蔵

報道関係の方のお問い合わせ先：国立工芸館 広報事務局(株式会社OHANA内)

Tel:03-6869-7881 Fax:03-6869-7801 E-mail:ncm@ohanapr.co.jp

本展の見どころ

1

心に寄り添いながら、 工芸の見方を再発見

素材と技術から工芸を読み解くだけではなく、作家の個人的な創作背景や感情に注目することで没入感のある新しい鑑賞体験を生み出します。

2

世界でも評価される 日本工芸の最前線を知る

工芸や現代美術の領域で国際的に活躍する6名の作家が集います。作家たちの代表作や最新作に込められた、柔軟な発想と伝統への敬意を感じ取ることができるでしょう。

3

幅広い分野の作品展示と 大胆な会場空間を実現！

刺繍、漆芸、陶芸、ガラス、金工と幅広い分野の作品が本展で展示されます。その特色を活かし、展示空間を作家ごとのイメージで統一するなど深みのある会場を作り上げます。

1. 沖潤子 《水蜜桃^{すいみょう}》2020年 個人蔵
2. 沖潤子 《Scarlet》2023年 個人蔵
3. 佐々木類 《植物の記憶/うつろい(如月)》2024年 作家蔵
4. 佐々木類 左から《植物の記憶/うつろい(弥生)》、《植物の記憶/うつろい(卯月)》2024年 作家蔵
5. 高橋賢悟 《還る》2024年 個人蔵
6. 高橋賢悟 《flower funeral-goat-》2024年 作家蔵
7. 中川衛 《象嵌臙銀花器「荒磯波」^{あらいそなみ}》2023年 作家蔵
8. 中川衛 《金銀象嵌「翡翠置物」^{あむせり}》2017年 作家蔵
9. 中田真裕 《Spotlight》2022年 個人蔵
10. 中田真裕 《Before the Storm》2024年 個人蔵
11. 松永圭太 《蛭^{へび}》2024年 作家蔵
12. 松永圭太 《蛭》2024年 作家蔵

撮影(No.1)：木奥恵三 撮影(No.2)：坂本理 撮影(No.3～12)：野村知也

作品画像(No.1～12)、本展チラシ画像(No.13)を広報用にご提供いたします。ご希望の方は当館ホームページの画像提供システムよりお申し込みください。



<https://www.momat.go.jp/craft-museum/reproduction>

展覧会をご紹介いただける場合は、読者プレゼント用招待券(5組10枚)をご用意しております。ご希望の方は画像申請の際に「その他」欄よりお知らせください。



1



2

沖潤子 *OKI Junko* 【美術作家】



1963年埼玉県生まれ。1991年セツモードセミナー卒業。現在は鎌倉市を拠点に制作している。裁縫が得意だった母の遺した道具と布にインスピレーションを受けて、独学で作家活動始める。古布や異素材を縫い合わせる刺繍表現は、記憶の重なりや感情の高まりを呼び起こす。主な展覧会に「沖潤子 さらけでるもの」(神奈川県立近代美術館 鎌倉別館、神奈川、2022年)、「anthology」(山口県立萩美術館・浦上記念館、山口、2020年)など。



5



6

高橋賢悟 *TAKAHASHI Kengo* 【鍍金作家】



1982年鹿児島県生まれ。2022年東京藝術大学美術学部工芸科鍍金研究室博士課程修了。川口市に工房を構える。2011年の東日本大震災をきっかけに動物の頭蓋骨に小花を加飾した〈flower funeral〉シリーズの制作をはじめ。精密な造形が可能なアルミの真空加圧鍍造という技術を用いて、「死と再生」をテーマに生命の尊厳を表現する。「驚異の超絶技巧! 明治工芸から現代アートへ」(三井記念美術館、東京、2017年(ほか各地を巡回)の選出を皮切りに、数多くの美術館での展覧会に参加。



9



10

中田真裕 *NAKATA Mayu* 【漆芸作家】



1982年北海道生まれ。2017年香川県漆芸研究所修了。2021年金沢卯辰山工芸工房修了。現在は金沢市を拠点とする。香川県で漆芸の技法である蒔^{まき}絵に出会う。光沢の中に複雑な模様が浮かび上がる蒔^{まき}絵の美質を活かした作品は、鑑賞者に抽象的な景色を想起させる。2019年にロエベファンデーションクラフトプライズ2019 ファイナリスト、第4回 金沢・世界工芸トリエンナーレ 大樋陶治斎審査員特別賞を受賞。

撮影：Yu Kadowaki



3



4

佐々木類 *SASAKI Rui* 【ガラス作家／アーティスト】



1984年高知県生まれ。2010年ロードアイランドスクールオブデザインガラス科修士課程修了。現在は金沢市内で制作。佐々木は採取した植物をガラスに挟み、焼き上げて灰にすることで、その姿を作品の中に封じ込める。四季に息づく植物は土地の記憶でもあり、見るものの郷愁を誘う。2019年にRakow Commission Award 2018 大賞(コーニングガラス美術館、ニューヨーク、アメリカ)、2021年に富山ガラス大賞展2021 大賞、2022年に国際ガラス展・金沢2022 銀賞と立て続けに受賞。

画像提供：ブルズアイガラス社
撮影：Hanmi Meyer



7



8

中川衛 *NAKAGAWA Mamoru* 【金工作家】



1947年石川県生まれ。1971年金沢美術工芸大学産業美術学科卒業。大学卒業後は松下電工株式会社(現・パナソニック株式会社)にプロダクトデザイナーとして就職。27歳で金沢に戻り、加賀象嵌に魅了されて彫金の道へ入る。高橋介州に師事。2004年に戦後生まれとしては初となる重要無形文化財「彫金」保持者に認定される。中川が注ぐ風景へのまなざしは、象嵌の精緻な彫り込みによって普遍的な情景となり、国境を越えて人々の心を打つ。本展では、「重ね象嵌」に本格的に取り組んだ記念碑的な作品から最新作までを展示する。



11



12

松永圭太 *MATSUNAGA Keita* 【陶芸作家】



1986年岐阜県生まれ。2010年名城大学建築学科卒業。2013年多治見市陶磁器意匠研究所修了。2016年金沢卯辰山工芸工房修了。現在は土岐市にて制作。液状になった泥漿^{でいしろう}と呼ばれる粘土を型に流し込む鑄込み成型を用いる。作品は地層を思わせる粗い風合いを持つが、それは松永の作品が長い年月をかけて堆積した土に根差した芸術であることを示している。近年はアメリカで定期的に展覧会を開催するなど、活動の幅を広げている。

撮影：野村知也

絵画や彫刻作品は、描かれているモチーフや色合い、その制作された背景、または制作した画家や彫刻家の歴史を知ることにより深い感動や共感を覚え、楽しめるにもかかわらず、工芸作品は見どころや見方がわからないという声を耳にすることがあります。確かに工芸は素材に対する深い理解とそれに伴う技術で表現されているので「何が表現されているのか」といったことよりも「どのようにこの作品が制作されているのか」といった点に注目が集まりがちかもしれません。しかし実際には多くの工芸家が自身の心象や社会とのかかわりといったモチーフにも重点を置いて制作しています。

心象展 Imaginal Crafts

本展では、現代の表現を提示する6名の作家の作品を展示します。刺繍の沖潤子は生命の痕跡を刻み込む作業として布に針目を重ねた作品を、ガラスの佐々木類は土地と自然の記憶を留める作品を、金工の高橋賢悟は現代における「死生観」と「再生」をテーマにした作品を制作しています。また金工の人間国宝である中川衛は伝統工芸の世界で各国の風景を抽象模様化した作品を、漆芸の中田真裕は心奪われた一瞬の光景を共有するための作品を、陶芸の松永圭太は自身の原風景と時間を留める地層を重ねモチーフにして作品を制作しています。

この機会に、工芸家それぞれの技術だけでなく今を生きる作家としての彼らの心の表現をご覧ください。